

看護専門職業人への夢を実現する学生支援

—進路選択決定・資格取得に係る学生支援体制—

古城 幸子*・杉本 幸枝・木下 香織・宇野 文夫

看護学科

(2008年11月12日受理)

平成20年度文部科学省は大学教育改革支援として優れた教育実践を支援するプログラムを示している。その中で「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に対して、本学看護学科の学生支援の取組を申請した。本学看護学科の学生支援は、学生自らが描く夢と誇りを持った将来像へ向かって卒業していくために行うものである。その支援の柱を修学支援、進路支援、資格取得支援の3つの取組として紹介、申請を行った。その結果、選定には至らなかったが、教育実績を振り返り、今後の課題が明確になった。

(キーワード) 学生支援GP、看護基礎教育、修学支援、進路支援、資格取得支援

はじめに

平成20年度文部科学省の「国公立大学を通じた大学教育改革の支援」は、各大学などにおける大学改革の取組の一層の推進のため、国公立大学を通じた競争的環境の下で、特色・個性ある優れた取組を選定・支援するものである。取組の枠組みとして、1.人材養成目的の明確化を踏まえた高等教育の質の向上、2.世界最高水準の卓越した教育研究拠点形成と大学院教育の抜本的強化、3.地域振興の核となる大学の構築、4.大学・大学病院が連携した医師等の養成システムの推進、5.産学連携による高度人材育成と教育プログラムの充実・強化の5つのプログラムが設定されている。「1.人材養成目的の明確化を踏まえた高等教育の質の向上」で設定されている内訳は、(1) 質の高い大学教育推進プログラム、(2) 社会的ニーズに対応する人材養成と大学の多様な機能の展開、(3) 大学の国際化と国家戦略としての留学生政策の推進、の3つの対象取組が示されている。

「社会的ニーズに対応する人材養成と大学の多様な機能の展開」の中で示された3つの対象取組は、＜社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム＞＜新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム＞＜専門職大学院における高度専門職業人養成教育プログラム＞である。本論は、＜新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム＞に対して、本学看護学科の学生支援の取組を申請した内容である。残念ながら選定には至らなかったが、学生支援の取組をまとめる作業を通して今後の課題が明確になった。

I 申請内容

1. プログラムの概要

本学看護学科の学生支援は、看護師国家資格取得を全員が達成し、学生自らが描く夢と誇りを持った将来像へ向かって卒業していくための支援である。

本取組は、入学と同時に看護職への動機づけを明確にするための支援を開始し、看護専門職として社会に有用な人材を確実に送り出すため、3年間を通して継続的に行なう支援体制を強化するもので、以下の3点からなる。1) 進路支援では、学生が主体的に進路選択決定を行っていくために、自己の将来像を明確に描くための支援である。2) 修学支援では、その将来像に向かって意欲的に学習を継続するために、GPAや授業評価を効果的に活用し、教育改善につなぐ支援である。3) 資格取得支援では、国家試験対策および卒業時の専門知識の再確認のために、卒業時到達度試験の実施で力をつけ、専門職としてのスタートラインに確実に到達するための支援である。

2. 学生支援に対する現在の基本的考え方等について

(1) 学生支援に対する理念や目標について

① 学生支援に対する理念や目標

本学の教育理念は、高度な専門的知識・技術を備えた良き社会人として保健医療・福祉・教育の各分野で地域社会に貢献できる有意な人材を育成することにある。

人材育成に関わる学生支援の目標は以下の3点である。

i) 学生が自らの将来像を明確に描けること(進路支

*連絡先：古城幸子 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

援)。

ii) その将来像に向かって意欲的に学習を継続すること(修学支援)。

iii) 描いた将来像に向かう社会への出発点に確実に到達できること(資格取得支援)。

学生に対しては、入学と同時に自らの将来像を描くための取組が実施され、進路選択が主体的に行えるよう、教員はその選択をしっかりサポートする。特に、看護学科では卒業と同時に看護師国家資格を得るという、専門職者として働くための基本条件を達成する必要がある。夢に描いた看護専門職の将来像への道を確実に歩みだすことにつながる。

②学生支援と教育活動や研究活動との関連

学生個々は、自己の将来像を具体的に描いていくことで、学生時代の短期目標、人生設計としての長期目標を明確にでき、学習への強い動機づけと、主体的な学習が継続できる。

教育活動の評価は、学生支援の取組を通して明確になり、授業改善にフィードバックされる。その評価分析を研究活動として実施し、カリキュラムへの反映、教育内容・方法の工夫改善が可能となる。

③学生支援の効果

i) 学生が自らの将来像を明確に描けること(進路支援)については、看護職への不適応学生を減少させることになり、夢や誇りを持って学習が継続できることにつながる。

ii) その将来像に向かって意欲的に学習を継続すること(修学支援)については、学習に対して自立的主体的に取組む姿勢を支援し、休学・退学者を減少させる効果が期待できる。

iii) 描いた将来像に向かう社会への出発点に確実に到達

できること(資格取得支援)については、進路選択が希望に添って実現でき、また看護師国家試験合格を達成できる。

(2) 学生支援に対する現在の取組の組織性について

①学長のリーダーシップ

本学は平成20年より公立大学法人となり、学長が理事長であり、大学の中期・年度目標にも、学生支援に関して、「学習支援・生活支援および進路支援に関し、その支援体制の一層の充実を図る」ことの重要性が明記されている。また、学長は、看護師国家試験全員合格に対する教職員の支援体制の強化について、強いリーダーシップを発揮している。また、豊かな教養を育むため「読書のすすめ」の企画者として直筆コメント入りで読書感想文は学生に返却される。学生の読解力やレポート作成能力の育成に大きな役割を果たしている。

②学生支援に関する検討組織及び現在の取組手続き

学生は、図1のような支援組織体制の中で3年間の学習を行っていく。

i 進路支援

担任が直接的な相談・助言・指導を行い、学務課が求人訪問者の対応や、求人の資料の整理など事務的な役割を担当している。委員会としては、教養教育委員会や就職委員会などが機能しており、他学科の教員からも多くの協力を得ている。

ii 修学支援

学務課および教務委員会、学生生活委員会が機能しており、個別な学習相談等は担任が担っている。

iii 資格取得支援

国家試験対策に対して、担任は学科会議での国家試験の分析や対策の検討をもとに、学生の対策委員とともに

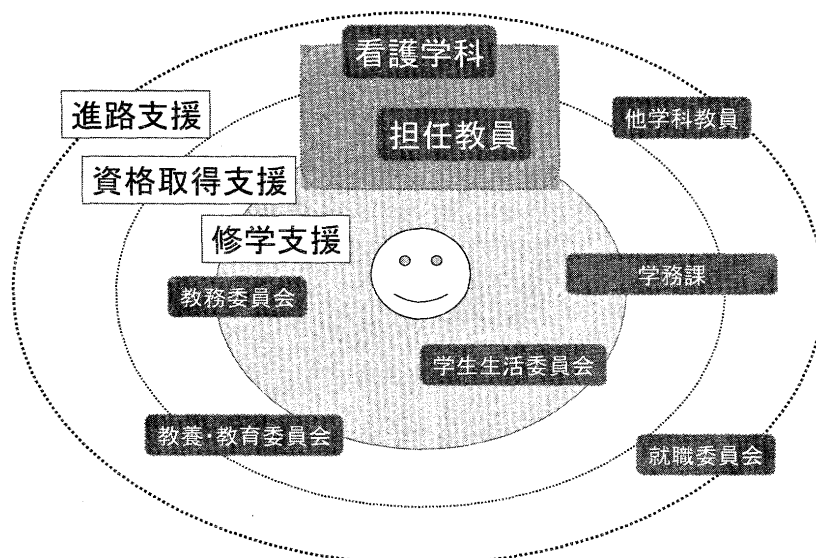


図1 学生支援の組織図

模擬試験を計画・実施する。教務委員会は、到達度試験の計画実施、弱点克服の補講計画などを検討し実施する。

③現在の取組の実施における学内の連携

前述したように、少人数の大学組織であるために、学科内の各役割と大学全体の組織的な連携は、十分なコミュニケーションを図ることができ、学生支援に関する教職員間の相互理解と情報交換は密である。各委員会は毎月1回、学科会議で提案された検討事項を持ち寄り、大学全体としての対応を計画している。

④学外関係機関との連携

i 進路支援

毎年秋に学科行事として開催している「看護学セミナー（NCS）」は、臨床現場の看護師を招いて臨場感のある講演を聞く。また、2年次冬休み前に「卒業生と語る会」を計画し、本学卒業生数名から現場の話を聞き、グループに分かれて進路相談をする。これらの行事を通して、看護職のロールモデルを具体的にイメージする機会となっている。

ii 修学支援

臨地実習においては、学外実習指導講師を任命し、学生への直接的な指導・助言を得ている。学内で学んだ知識を統合し、個々の患者や家族に適切なケアを提供することで、看護の喜びや誇りを育むことにつながり、学習への強い動機づけを得ている。

iii 資格取得支援

非常勤講師に基礎医学系国試対策の補講を依頼し、学生の苦手領域の克服に効果を上げている。

(3) 社会的ニーズや学生のニーズへの対応の現状について

①学生支援に関する社会的ニーズとそのニーズへの対応<社会的ニーズ>

近年の急速な高齢化の進行と共に、生活習慣病や慢性疾患の増加など、健康問題の変化への専門的な対応が社会的なニーズとなっている。医療現場での医療技術の急激な高度化による専門的な知識や技術の質の高さが求められている。また、医療安全の視点の強化や、一方で医療を受ける側の意識や関心も向上し、権利意識の高まりなどによる倫理的な課題への対応も求められる。そのため、看護職は多くのリスクを背負いながら厳しい現場に従事しており、看護職の定着率や早期離職率の増加は、大きな社会問題である。看護専門職としての問題解決能力を備え、チームとしての人間関係能力があり、多職種との連携、調整ができる人材の育成は急務となっている。

一方で18歳人口の減少に伴って、看護職への進路選択は4年制大学を希望する受験生も多く（資料3）、また、本学卒業生が4年制大学卒業生と同じスタートラインについて臨床現場に出ることになる。また、国家資格が取得できない場合は採用内定が取り消され、国家試験受験の

ために1年間で費やすことになり、社会的にも大きな損失である。

<ニーズへの対応>

本学の学生支援が有効に機能することで、社会的ニーズへの対応が可能になる。

i 進路支援では、看護専門職の誇りと希望を実感する体験を数多く計画しており、卒業後も学び続ける生涯学習力を身につけることが卒業時の目標の一つとなる。そのことで、リスクの高い臨床現場における不適応や早期離職を防ぐことになる。

ii 修学支援では、GPAや到達度試験によって、成績不振者を早期に発見し、担任および教務委員によって個別指導が行なわれる。

2002年度入学生から導入したGPA（Grade Point Average）評価は、学生の成績評価の精密かつ客観的な指標となり、2005年度からは従来の成績評価（優、良、可、不可の4段階評価）との併用を制度化している。この取組は単位の実質化を図るものである。

iii 資格取得支援では、1年次から低学年模試を段階的に実施し、成績不良者には個別相談・助言を行っている。また、3年次には年間数回の業者模試を計画し、学生個々の成績状況を担任が分析し、学科会議などで対応策を検討している。図2のように過去12年間のうち2003年までは全国平均とほぼ同様の合格率の推移で、不合格者への卒後のサポートが必要であった。その評価を分析し、2002年度入学生より卒業時到達度試験を導入した結果、その後の5年間の合格状況は、2006年にのみ不合格者が2名あったが、ほぼ全員合格を果たしている。

到達度試験は、臨地実習科目の成績評価の一部として導入した。臨地実習科目とは、病院等での実務に即した実習科目で、成人・老年・小児・母性・地域・精神看護学の6科目が開講されている。臨地実習の成績評価については、知識、技術・技能、態度・習慣の各項目について

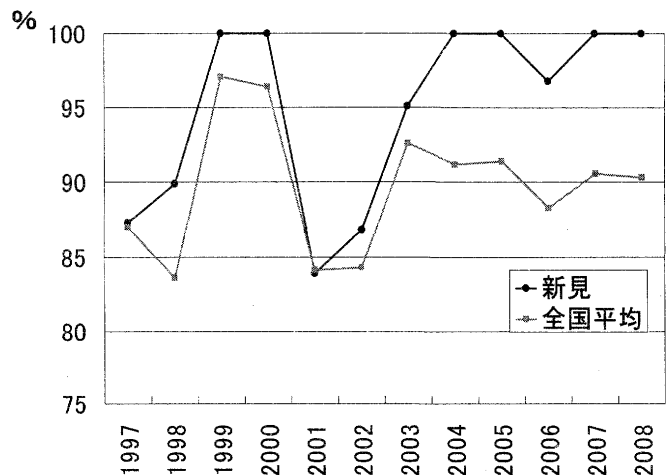


図2 国家試験合格状況 12年間の推移

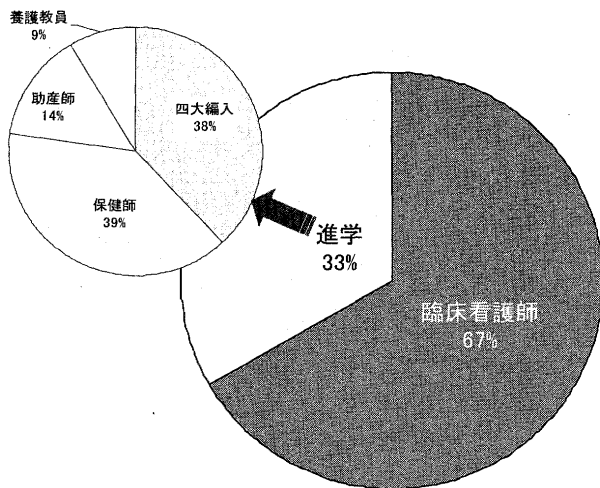


図3 過去5年間の主な進路 2003～2007

て実習状況及び学生が提出するレポートに対する評価し、到達度試験成績を併せて評価している。

②学生のニーズとそのニーズへの対応

<学生のニーズ>

本学は1980年に開学し、3年課程の看護師養成を29年間行い、1500名を超える卒業生を送り出してきた。2004年には1年間の保健師養成の地域看護学専攻科（定員15名）を新設し、本学看護学科からの進学者が年々増加している。

この数年間の看護学科の卒業生のうち、四年制大学編入、専攻科進学、保健師・助産師・養護教員の課程に進学し、その割合は約40%になる。（図3）。その傾向は年々増加傾向にあるが、その要因は、入学生の85%が大学入試センター試験を受験していること、60%が4年制大学の看護学科を併願した学生であることが影響している。また、学士取得後にキャリアアップを図り生涯学習への意欲を持った学生が進学の選択をすることが多いのも特徴である。

就職希望者では、県外出身学生が約9割を占めていることから、就職選択では出身地の総合病院を希望することが多い。そのため、就職先の病院などの情報が得られにくいのが現状である。

<ニーズへの対応>

全体的な対応としては、過去の就職・進学者の報告書を学務課が整理し、情報をいつでも閲覧できるようにしている。また、2年次後期末に卒業前の3年生から進路選択と決定の経過や課題についての伝達会を行っている。個別な対応としては、小論文の指導・添削、英語論文抄読、面接指導などを継続的に行っている。

現在は、病院・施設から求人に来学する場合が多く、その情報は学内ホームページで学生が閲覧できる体制を

作っている。また、病院見学会などの情報を得て、夏休みを活用して複数施設の見学会に参加する学生も多い。現段階では、就職先決定に困難な面はなく、ほぼ第1希望の就職先に進むことができおり、専門職への就職率は毎年100%である。しかし、学生の出身地が中国四国・九州方面と広いため、求人情報が受け身で十分に得られているとは言い難い。そのため、その年度の出身者が多い県に、就職委員会を中心に出向いて求人情報を得るように努力している。

(4) 現在の学生支援を行う教職員の資質向上

①学内で学生支援の重要性についての教職員の共通認識

図1でも示したように、学生に対する個別的支援の中心となる担任と学科会議、学生生活委員会、教務委員会、就職委員会などによる教員間の連携や情報交換を行っている。大学全体においてもFD集会、人権啓発研修会などを計画実施している。

②教職員の専門的知識や能力の向上のための取組

看護学科の教員18名を4つの単位「専門基礎領域」「成人看護学領域」「老年・地域・精神領域」「母性・小児領域」に分け、その中の教授・准教授1名がスーパーバイザーとして各4～5名の教員に対する教育・研究指導を行う「スーパーバイズシステム」を5年間継続している。その単位では、実習指導上の悩みや授業案の検討、学生への研究指導上のアドバイスなど、日常的教育・研究活動について教師の能力を高めることに役立っている。

(5) 現在の取組の実施後の評価及び取組内容の改善について

①学内での学生支援評価システムとその観点

就職・進学状況については、その実績で評価し、国家試験対策は合格率で評価することができる。GPAと到達度試験については、資料1・2のような評価の視点を設定している。

②これまでの評価結果と取組の改善

GPA制度によって、特別な支援を必要とする学生を把握すること、到達度試験によって、学生の学力に応じた学習の機会を与えることによって、有効に進路選択とその実現への支援がなされている。

これらのGPA制度と到達度試験の取組は、平成17年度に独立行政法人大学評価・学位授与機構によって実施された機関別認証評価において、基準5の「単位の実質化への配慮がなされているか」及び基準6の「短期大学として、その目的に沿った形で、教養教育、専門教育等において、課程に応じて、学生が身に付ける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等についての方針が明ら

かにされており、その達成状況を検証・評価するための適切な取組が行われているか。」の基準において高く評価された。

到達度試験の導入によって、学生の学習へのモチベーションを高めることができ、その結果高い学習効果が得られている。多くの学生は、1回で合格点に達することができるので、十分な理解に達している学生にとっては負担が少ないものである。一方、理解度の低い学生に対しては、再試験が課されるので、苦手な分野の学習を繰り返すことになり、基礎学力の向上につながる。なお、到達度試験の導入以降において、この試験の成績が原因となって卒業が延期された学生はいない。

③効果が得られていない取組とその課題

現在行っている取組についてはそれぞれの側面で効果を上げているが、以下の点で課題があり、より支援体制の強化が求められる。

- *入学時に看護職への動機づけが乏しい学生が増えてきている。
- *在学生の希望する就職先は県外が多く、正確な情報が収集しにくい。
- *進学希望者が増加傾向にあり、教員は助言指導に多くの時間が費やされる。
- *卒業後の支援窓口がない。
- *専門的な科目に対する成績が伸び悩む学生が少なく

ない。

- *看護師国家試験の合格率を維持することは教員の力と時間が十分に必要となる。

3. 学生支援に対する現在の基本的な取組の状況について

①入学から卒業までの総合的な支援

入学から卒業までの学生支援の状況を図4に示した。学生への支援の中心は、看護学科教員のクラス担任制による3年間の継続的な活動であり、同時に、担任以外の看護学科教員および他学科教員がオフィスアワーなどを活用して、多面的に支援を行なっている。

また、2年次後期から3年次前・後期まで開講される「看護研究」では、看護学科教員がそれぞれ4～5名程度の学生を担当しており、卒業研究の指導とともに、進路の相談や指導などの支援もきめ細かに行なっている。

<共通する支援>

進路支援・修学支援・資格取得支援の3つの支援活動に共通した支援内容として、入学直後に短大の教育理念、履修などの学生生活に関連した新入生合同ガイダンスと、看護学科の教育目的・目標、3年間および1年次のカリキュラムなどに関連した学科別ガイダンスを実施する。

この2つのガイダンスを通じて、学生は3年間の学生生活と卒業後の進路選択までの課題などを理解し、学生生活をスタートする。また、入学時における卒業後の希望

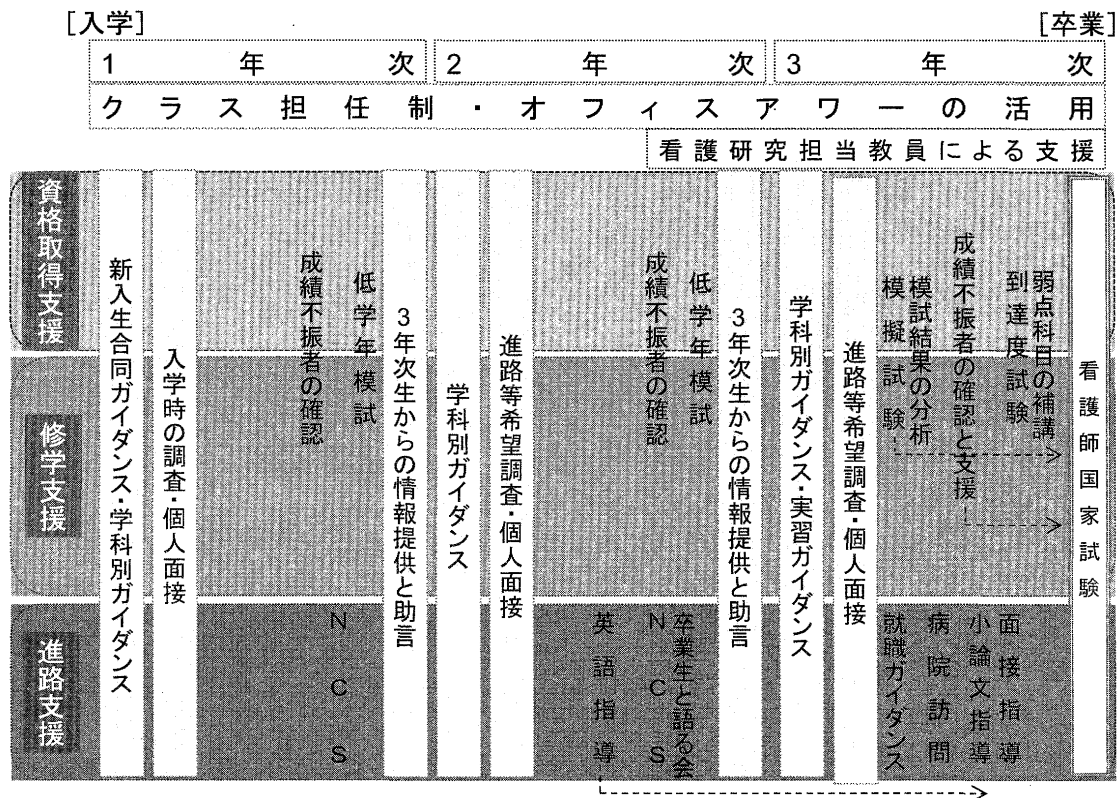


図4 入学時から卒業までの支援状況

進路などを調査するとともに、個人面接により学生が抱えている不安や疑問を把握し対応を行なっている。学科別ガイダンス、進路希望調査および個人面接は、2・3年次の開講時にも実施している。

また、1・2年次の修了前の時期に、3年次生から、履修の進めかた、進路選択や国家試験対策の実際などについて情報提供と助言を受ける時間をとっている。身近な先輩からの情報や助言は、学生にとってその後の具体的な示唆を得られる貴重な機会となっている。

i 進路支援

進路支援としては、戴帽式に代わる行事としての看護学セミナー（NCS）が挙げられる。NCSは、学生が関心をもっているテーマを設定し、看護について考えを深めることを目的としている。臨床で活躍する看護師や看護を受けたご家族の講演やシンポジウムなどを聞くことで学生は、学習への動機づけになると同時に進路選択に役立てることができる。2年次には、看護の各方面で活躍する卒業生を招いて卒業生と語る会を実施している。就職病院や編入・進学先を決定するまでの過程、現在の職場での様子などを卒業生が紹介する。

就職を希望する学生には、3年次前期に就職ガイダンスを行ない、学内で作成した進路の手引きを使用して、就職活動やその支援内容について説明している。進路の手引きには、専門看護師・認定看護師など卒業後の目標となる資格や進学についての内容も記載している。

また、学生が就職を希望する地域の中から、過去の卒業生の就職状況をふまえて、特に支援の必要な地域の病院に看護学科教員が訪問し、求人情報の収集、本学学生に就職希望者がいることを伝える病院訪問を実施している。

就職希望者、進学希望者の受験対策として、試験科目に応じて、小論文や面接についての指導を行なっている。大学全体で取り組んでいる読書活動の推進は、この基礎となっている。また、進学希望者には、英語科目の受験対策として、英語担当教員が長文読解などを定期的なゼミ形式で、3年次の進学試験時期まで継続して指導を行なっている。

就職・進学先の受験後、学生は試験内容などを記載する受験報告書を提出している。受験報告書を閲覧することによって学生は、受験先の出題状況を把握することができる。

2007年度卒業生の進路希望（3年次4月）と実際の進路決定の状況については資料4に示した。

ii 修学支援

修学支援としては、学生が授業時間以外の時間にも教員に質問や連絡ができるよう、オフィスアワーの設定や

シラバスに教員のメールアドレスの掲載を行い、学習環境の整備を行なっている。また、学生生活実態調査や卒業時満足度調査を実施し、学生の生活実態やニーズあるいは大学への評価を把握し、組織改善や教育改善に役立てている。

成績不振の学生には個別的な指導を行なえるよう、前期・後期試験終了後に履修状況とGPA算出による成績の確認を行っている。1・2年次後期終了前に実施している専門業者の看護師国家試験低学年用模擬試験の結果によっても、成績不振者の確認をしている。

3年次では、1～2カ月に1回、専門業者や教員の作成した模擬試験を実施し、結果を分析している。

全臨地実習終了後に行なう到達度試験の結果によっても成績不振者を把握している。また、3年次の到達度試験後の時期には、専門基礎科目を含めて補講を実施し、学生の弱点科目への対策を講じている。

iii 資格取得支援

資格取得支援としては、修学支援で実施している成績不振者の確認、到達度試験の実施、弱点科目の補講、模擬試験の実施と結果分析が共通した支援となっている。中でも、到達度試験は、学生が看護学の学習到達度を自身で確認することで、その後の国家試験受験対策の学習への動機付けにもなる。

また、模擬試験の実施では、弱点分野の把握とともに、実際の国家試験の時間配分やマークシートの使用にも慣れ、学生が試験で実力を発揮できるための準備にもなっている。模擬試験結果は、学生個々に必修問題、一般問題および状況設定問題で正解率を算出し、合格基準ラインへの到達状況を折れ線グラフ（図5）で表わしている。学習の進捗状況と苦手分野の分析をもとに学生への個別的な指導に使用している。

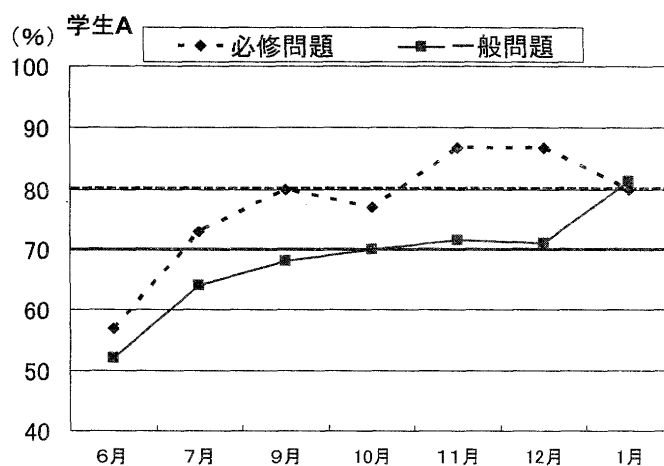


図5 看護師国家試験模擬試験結果の分析例

②現在の取組の連携の状況

学内の学生支援の実際とそれに関係する組織を図6に示した。3つの学生支援の活動は、担任を中心とした看護学科と大学全体の取り組みとして、連携をとりながら行なっている。

i 進路支援

進路支援では、担任の直接的な相談・助言・指導を中心とし、その状況は看護学科会議にて報告している。担任から学生の就職希望状況の報告を受けて、就職委員会が病院訪問を企画、看護学科の協力のもとで実施する。就職委員会ではその他に、就職ガイダンスや進路試験のためのマナーガイダンスも実施している。卒業生の進路や求人訪問病院の情報の管理は学務課が担当している。試験科目に応じた支援として、小論文、面接、英語学習の指導を他学科教員の協力を得ながら実施している。また、教養教育委員会が読書活動の推進を行なっている。

ii 修学支援

学務課および教務委員会で時間割の作成や成績管理などの学習全般に関する支援を行い、学生生活委員会が学生の実態調査を含めて生活面の支援を行なっている。担任が各年次の学科ガイダンスにより学習への導入を図り、個人面談を実施して学生の生活や学習、希望進路について把握するとともに相談窓口となって、学生に最も身近な教員として継続的に学生生活の支援を行なっている。また、卒業時の満足度調査は、FD委員会が実施し、大学全体のFD活動に反映する。

iii 資格取得支援

教務委員会は、到達度試験の計画実施、弱点克服の補講計画などを検討実施する。看護学科教員は、看護師国家試験の出題の動向をふまえて、到達度試験を作問する。担任は、国家試験の分析や対策の検討、模擬試験計画・実施を行い、個別的な指導を行なっている。

4. 社会的ニーズ等に対応し、特段の工夫などが行われ、著しい効果が期待される新たな取組（経費補助の対象）

(1) 新たな取組の趣旨・目的

新たな取組の動機と背景

<新たな取組>

- i) 進路支援：就職説明会、就職先訪問、進学支援、卒業後のキャリアアップ支援
- ii) 修学支援：GPA評価システムの活用、授業評価システムの活用
- iii) 資格取得支援：国家試験の分析、到達度試験作問支援システム開発

<動機・背景>

i 進路支援

就職情報を豊かに…本学学生の出身地の9割が県外であり、就職先として希望する出身県の病院情報が収集しにくい点がある。学生の多くはインターネットによる情報から収集し始めるが、検索に時間がかかったり、up to date な情報の判断が困難であったりと、時間のロスが大きい。また、実際の病院の雰囲気や卒後教育などに対する疑問点などを解消することが難しい。

・進学希望者の支援の強化…進学希望者が年々増加傾向

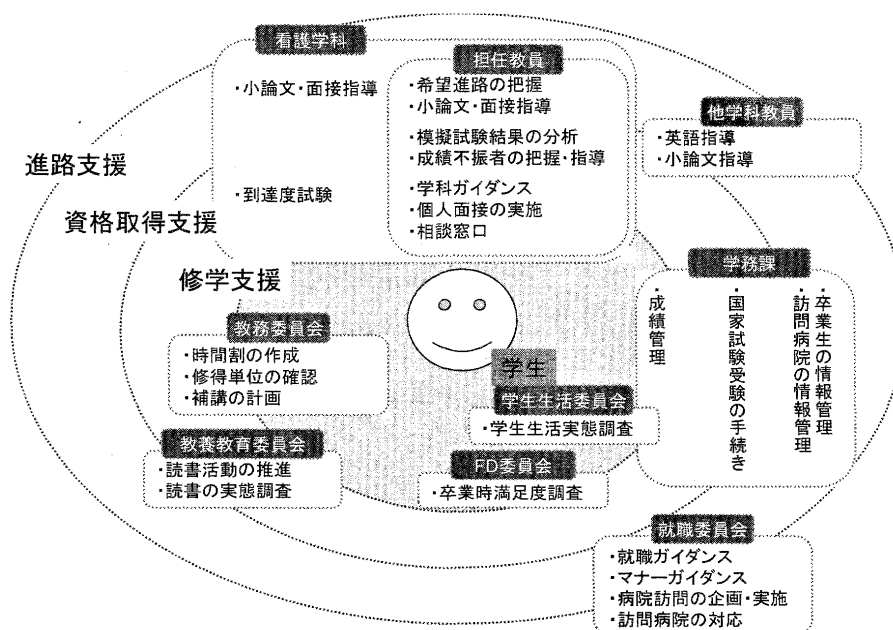


図6 学生への支援の実際

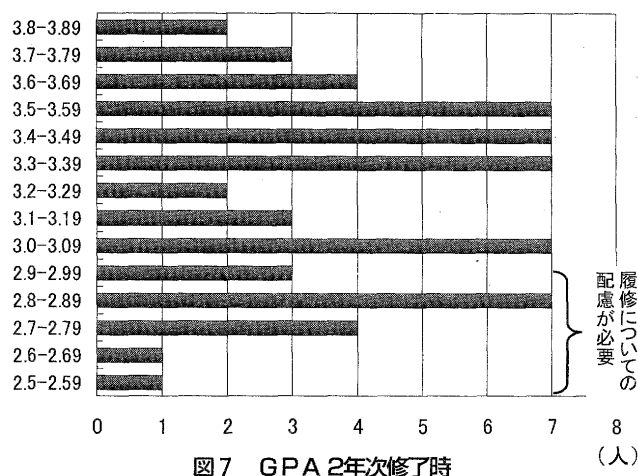


図7 GPA 2年次修了時

にあり、英語力や小論文作成能力が求められる。そのため教員は正規担当科目以外の多くの時間を割いて指導している現状にある。

- ・卒業後の早期離職を防ぐ…臨床現場の厳しさや現実と直面して、1年以内に離職する早期離職看護職が約9%とされている。本学の調査でもほぼ同じ傾向がみられる。

ii 修学支援

本学学生は看護専門職を目指す明確な目的意識のもとに入学してくる学生が多い。しかし、今後の課題として考えられる点は、四年制大学への入学希望であったにもかかわらず、不本意な気持ちで短期大学である本学を選択した学生や、専門職を目指す動機づけの薄い学生など様々な学生が漸増している。このように不本意な気持ちを持つ学生や動機づけの薄い学生は、目的意識を見失いカリキュラムが進行するにしたがって学習意欲の低下、さらに成績の不振につながりやすい。過去5年間の看護学

科の退学者は資料5に示す。この傾向は、GPAで見ると明確に2分極を示し(図7)、毎年2~3名の退学者があることから、早期に対策を施す必要がある(過去5年間の看護学科の退学者は資料5に示す)。しかし、学務課の体制やシステム上、GPAや授業評価結果が各教員に返却される時期が遅く、その活用が後手になることもまれではない。

iii 資格取得支援

専門職としての看護師国家試験は全員が合格する必要がある。そのためには学力の向上は必至である。また、合格率100%は、教員にとっても卒業生を送り出す喜びは大きく達成感を与えてくれる。しかし、教育・研究活動と日常的に仕事量の多い教員にとって、到達度試験の問題作りやその分析は過重な負担となっていることも事実である。

① 新たな取組の大学における意義

学生支援の新たな取組は、学生の進路選択や決定に有効に機能し、また国家試験合格率を維持することで、看護専門職を社会に送り出す大きな責務を果たすことになる。また、システム開発によって効率的に学生を支援でき、教育・研究への改善に寄与すると考えられる。

(2) 新たな取組の独自性

① 新しい発想や独自の創意工夫

i 進路支援

就職説明会は、希望する学生を対象に、3年次早期に行う。現在、病院等から随時求人のための訪問を受け、就職委員や3年次担任が対応している。この求人説明を学生が直接受けることができる「就職説明会」を複数回企画し、学生の希望する病院・施設に案内を出して、多くの学生が直接病院情報を得る機会を作る(図8のAパターン

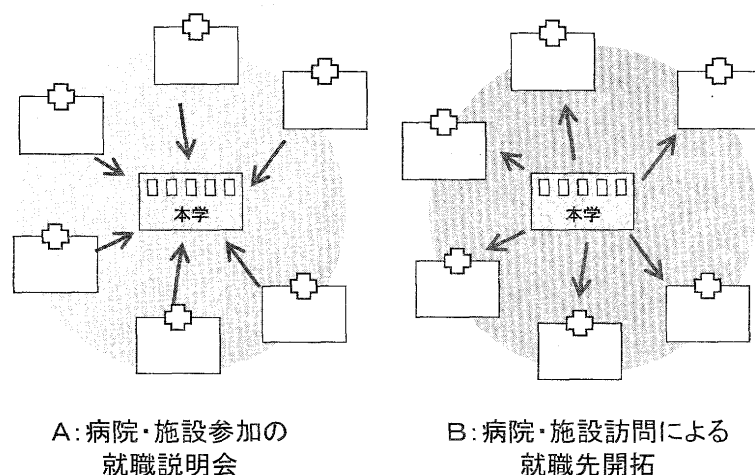


図8 就職情報の取得

ン)。

就職先訪問は、教職員が県外の病院・施設を訪問し（Bパターン）、情報が少ない県外の病院との連携と信頼関係を作っていく。

進学支援は、現在他学科の教員の協力によって英語論文の抄読会や、小論文添削指導などを時間外で行っており、多くの学生がその指導を受けている。その指導体制をシステムの中で行えるように時間割編成や担当教員の増加などを検討する。

卒業後のキャリアアップ支援は、短大のホームページ上にIDとパスワードで保護された支援窓口を設置する計画である。職務に関する専門的・学術的な情報に関すること、研究支援などの相談助言を行う。卒業生の登録制とし、電子メールによる相談、在学生と卒業生が参加できるブログの開設、希望者へのメールマガジンの発行などである。

ii 修学支援

GPA評価システムの活用では、教員が最終評価をオンライン端末から入力することによって、教務電算システムにおいて最新のGPAが算出されるシステムになっており、学生は学内の端末からいつでも自らのGPAを閲覧することができる。一方、教員は、学生のプライバシー保護の観点から、通常自らが担当する科目の成績のみを閲覧することしかできないが、担任教員等が指導の必要があるなど、正当な事由がある場合には、学務課に申請することによって、特定の学生またはクラス全体のGPA及びGPAによる席次一覧を閲覧することができる制度となっている。

GPAによる個別支援と、1・2年次のガイダンスを強化することで、将来の目標像に沿った学習へのモチベーションを高め、集団への支援を行う。GPAの集団の傾向については、非特定化した情報として学科教員が共有し、

教育・授業改善に役立てる。

学生による授業評価システムの活用では、早期に担当教員に返却し、改善に取組めるシステムとする。また、学生自身の授業に対する取組姿勢の評価を、集団の評価として学生に返していくシステムも検討が必要である。

iii 資格取得支援

国家試験の分析では、国家試験受験者の正答・誤答を分析し、本学学生の傾向を明らかにする。その結果を到達度試験に反映させ苦手分野、知識不足分野を強化する。

到達度試験作問支援システムでは、到達度試験においては、試験問題の適正化が図られているために、正解率が低い分野については、何らかの教育上の問題点が潜在していることを把握することができる。別に実施している「学生による授業評価」の結果と照合することによって、問題点がカリキュラム（授業編成・時間数）、教育内容・方法（教材等を含む）、学生の自己学習などのいずれにあるかを推測することができ、教育改善効果も期待できる。

今回はさらに、教員が端末からサーバに問題文および選択肢を入力し、同時に各選択肢の難易度分類（正解肢および誤答肢を含めて4段階）を入力することによって、教員が想定する各問の正解率と全体の最低合格点を算出し、正解肢分布をランダム化するプログラムを開発する。想定正解率と実際の正解率の比較によって、教育改善を要する項目の抽出ができる。教員にとっては、現在行っている作問に要する時間の効率化と、問題の精度を上げることができる。また、学生にとっては、適切で効果的な問題に取り組むことができ、知識を確実に理解し、知識の統合と応用の巾を広げることに期待できる。

② 他大学への参考となるか。

看護師の就職システムは病院主体であるが、本学がイ

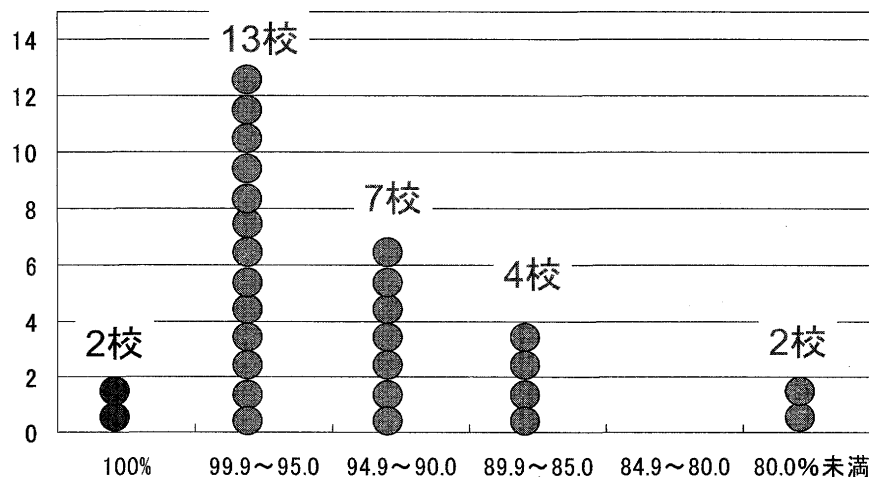


図9 第97回看護師国家試験合格率（短期大学・新卒者対象）

ニシアティブをとり、病院等と連携していくシステムは、現在のところ見かけない。卒業生のキャリアアップシステムは、卒業生との交流で在学生への進路選択への影響も大きいと思われる。

また、図9のように全国の短期大学28校のうち2008年2月に行われた看護師国家試験では合格率100%の短大はわずか2校であった（養成施設別の合格率は資料6）。本学は、看護師国家試験対策をすることで全国の短大の合格率平均93%を上回り、連続100%である。現在の国家試験対策の上に、さらにGPA・授業評価システム・到達度試験作問システムをリンクさせることで、教員の作問能力の向上と効率化を図ることが可能であり、他大学への参考事例となり得る。

(3) 新たな取組の有効性（効果）

①本取組の効果

i 進路支援

*進路選択・決定の情報が効率的に得られる…学内で病院等の就職説明会を直接聞くことができることは、学生の負担が軽減され、また、就職先訪問での情報と併せて、より多くの選択肢を学生に提示できる。

*卒業後のイメージが明確になる…就職説明会では、一施設だけでなく多施設の状況を比較することで、選択の幅や選択基準を学生の視点で見極めることができる。また、卒業生のキャリアアップ支援窓口のブログなどを通して、生の声を聞く機会ができ、学生自身のイメージが具体的にになる。

ii 修学支援

*成績不振学生を早期に支援できる…GPAをより効率的に活用することで、個別な対応ができ、学習意欲の向上や継続が期待できる。また、学生の学習ニーズに添った教育方法の工夫など授業改善にも役立つ。

*休学者・退学者を減らすことができる…看護専門職への将来像が描けない学生や、成績不振による学業継続意欲を失いそうな学生に対して、早期に個別な対応ができ、3年間の学習を意欲的に継続できる支援となる。

iii 資格取得支援

*看護師国家試験の合格率を維持することができる…全員合格を目標に、看護専門職として社会に貢献する卒業生を送り出せる。

*本学の評価を高め、在学生に誇りを与える…受験生へのイメージを高めるとともに、本学に入学してきた学生に自信と誇りを育てることにつながる。

②新たな取組と現在の学習支援の取組との相乗効果

本取組は、現在行っている進路支援・修学支援・資格取得支援を基盤としており、個々の教員や委員会での支援をシステム化することで、より確実な学生支援となる。

③社会的ニーズ・学生ニーズとの対応

質の高い看護専門職を育成するという社会的ニーズに対しては、看護職に誇りと自信を持った学習継続意欲のある卒業生を送り出すことである。また、希望に添った進路選択・決定をしたいという学生のニーズには、進路情報などの選択肢を多く提示でき、進学支援を強化することで、十分に対応できると考える。

④教育活動と研究活動の関連性

本取組が効果的に機能していけば、GPAの結果を授業改善に役立てることが可能となり、教材開発や教育方法の検討など、多面的な教育研究が期待できる。

(4) 新たな取組の改善・評価

①新たな取組の体制や方法、評価計画

i 進路支援

就職委員会・担任を中心に「病院説明会」参加学生の反応を調査し、また、参加した病院・施設側の反応も加えて実施の意義を分析する。「病院訪問」については、訪問した教職員の復命書を元に、学科会議で学科教員相互の情報交換を行い、次年度の進路指導に役立てる。

ii 修学支援

教務委員・各担任を中心に、GPA・授業評価の分析を行なう。

iii 資格取得支援

担任を中心に、国家試験の問題分析、到達度試験作問支援システムの効果について分析する。

②新たな取組実施後の評価と観点

評価は、学生の希望と進路決定の分析、GPAの成績向上、授業評価の改善、国家試験模擬試験の成績向上、苦手分野の克服などを観点とする。

③評価結果の活用

担任により、個別相談の資料として活用する。また、集団に対してはその傾向を授業改善に役立てる。また、卒業時の満足度や職業継続に対する状況などの調査分析をとおして、支援の問題点や今後の課題を明確する。

(5) 新たな取組の実現可能性・将来性

①新たな取組の各年度の運用

初年度には、実施できる可能性のある就職説明会や就職先訪問について、企画実施する。またGPAおよび到達度試験については新たなプログラム開発を行う。

最終年には、実施した取組の評価と、開発したプログラムの運用を行う計画である。

②新たな取組の実現に必要な実施体制の整備

実施体制は、学科内の各担任と教務委員が中心となり

「実施・評価委員会」を発足させ、この委員会が企画・実施・評価を行う。逐次その内容は学科会議に報告され、学科の全教員が情報を把握できる体制とする。さらに、学生生活委員会、教務委員会、就職委員会などで大学全体の方針へと反映していく。

③補助期間終了後の展開、および評価体制・方法・指標の設定および当該評価の将来的反映

プログラム開発が終了すれば、その運用になるため、多くの経費が必要となるわけではない。また、就職先開拓も2年間で関係を深め、その後の計画継続をスムーズに行うことができると思われる。今回の取組は補助期間終了後も継続していける内容である。

評価は、「実施・評価委員会」の中で進めていく予定である。その他は、現在の各委員会の機能でほぼ対応できると思われるが、評価の中で新たな課題が見出される可能性もあり、そのつど検討をしていく予定である。また、**資料 1** 中期長期目標の設定に従って、成果を明確にしていく予定である。

5 データ、資料等

本学のGPAシステム

この方法によって、学習・履修指導等の学生支援を個別に必要とする学生を客観的かつ的確に把握することが可能となった。GPAにおいては、4が最高評価であり、おおむね3.5以上は成績優秀であり、3.0前後から3.5未満は平均的な評価である。一方、3.0前後以下である場合には、履修についての配慮が必要であり、特に2.5以下の場合には特別な指導等の支援を要するものである。

<注 1：GPA評価基準>

本学におけるGPA評価は、次のような基準によって実施している。各科目の履修席積を0点から4点までの5段階の得点(p)で評価し、各得点にそれぞれの科目の単位数(m)を乗じた数の総計を、履修した科目の総単位数で除した数値をGPAとしている。

$$GPA = \frac{\sum p_i \cdot m_i}{\sum m_i}$$

ただし、pを各科目の得点、mを当該科目の単位数とする。各科目の得点は、次の基準によって算出している。成績評価に試験を課す科目においては、最終評価試験において、100点満点の80点以上の得点にA (p=4)、80点未満70点以上の得点にB (p=3)、70点未満60点以上の得点にC (p=2)を与え、最終評価試験で60点未満であったが、再試験において60点以上であった場合にC-(p=1)、再試験においても60点未満であった場合にD (不合格) (p=0)を与えている。

資料 2 到達度試験

到達度試験は、成人看護学を2つの分野に分割し、6科目7分野について、各70問のマークシートを用いた5者択一問題として実施している。問題の内容は、各分野において必要とされる(1)知識、(2)技術・技能、(3)態度・習慣の各項目に関するものである。答えは、電算システムで自動的に採点される。一定の点数に達しなかった学生は、再試験を受験することとなる。このような到達度試験が、実効性を確保するためには、適正な問題が出題されることが求められる。そこで、到達度試験電算システムは、各学生の成績を算出するとともに、各試験問題の適否についても自動的に評価できるシステムである。

<注 2：識別指数の算出>

識別指数(DI)は次の式で算出している。

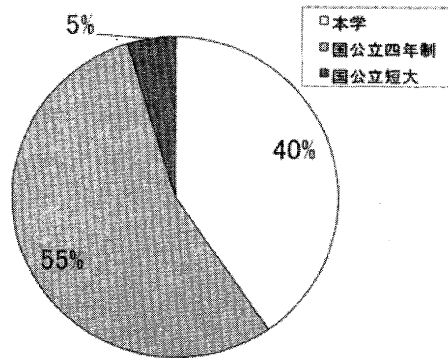
$$DI = \frac{A \cdot D - B \cdot C}{\sqrt{(A+B)(C+D)(A+C)(B+D)}}$$

ただし、Aは当該試験科目の総得点が上位1/4にあるグループのその問題の正解者数、Bは当該試験科目の総得点が上位1/4にあるグループのその問題の誤解者数、Cは当該試験科目の総得点が下位1/4にあるグループのその問題の正解者数、Dは当該試験科目の総得点が下位1/4にあるグループのその問題の誤解者数とする。

試験問題に関する評価項目は次のとおりである。(1)問題ごとの正解率：難易度を示す指標である。30～70%が望ましく、80%を超える問題または20%に達しない問題は不適切と判断される。(2)識別指数：その問題が成績の良い学生と悪い学生を識別できているかどうかを示す指標である。-1～+1の間に分布し、+0.2～+1の問題が望ましく、+0.1以下の問題は不適切と判断される。(3)選択肢ごとの解答率分布：正解肢の解答率がもっとも高くなり、誤答肢にピークのある問題がないかどうかなどの基準による。正解肢意外に解答率のピークがある問題は、問題に誤りがあるか、または解答者に誤解を与えている問題と判断される。(4)正解肢の分布：当該科目の試験に全体において、正解肢となる選択肢の番号が十分にランダム化されているかどうか。問題評価が基準に満たしていない問題については、出題教員が問題内容を点検して、改善し適正化することにより、教員の作問のスキルを向上させるとともに、試験問題を良好なものとするができる。このようにして作成した質の高い問題を用いることによって始めて、学生の学習到達度を適切に判断することができるようになった。

資料 3

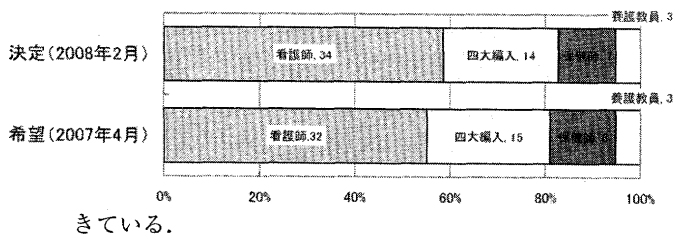
2007年度入学生の第1志望は、4年制の看護系大学志望が55%と最も多く、40%の本学志望者は、推薦入試の学生であった。推薦入試の学生の中にも、4年制の併願をする学生がいることが、2002年度の学生生活実態調査でも明らかになっており、看護学科全体の71.4%であった。



2007年度入学生の第1志望

資料 4

2007年度の進路状況を見ると、3年次4月当初の希望と、その進路決定はほぼ同じで、希望どおりの進路決定がで



きている。

資料 5

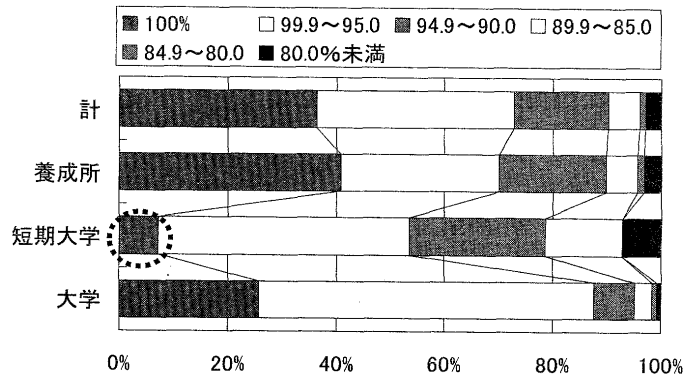
過去5年間の退学者数は、2～3名で、その理由は進路変更であるが、2・3年次での退学者の中には、成績不振が動機になっているケースも見られる。

過去5年間の退学者数

	2003年度			2004年度			2005年度			2006年度			2007年度		
学年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
数	2	3	2	2	1		1		2		1	2		2	
計	7			3			3			3			2		
卒業 者数	55			71			64			63			58		

資料 6

2007年度の国家試験合格者を養成所別に見ると、4年制大学、3年課程養成所と比較しても、短大の合格率はやや低い結果である。100%合格を果たした本学は丸印の中に位置している。



II 選定結果

今回の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」への申請は、大学から165件、短大から36件、高専から29件の230件であった。そのうち選定された取組は、大学18件（選定率9.7%）、短大4件（11.1%）、高専3件（10.3%）であった。公立短大からの申請は4件あったが、いずれも選定されなかった。本取組も選定には至らず残念な結果であった。

以下が文部科学省からの非選定理由である。
(非選定理由)

新見公立短期大学においては、看護師養成校としての明確な教育理念の下、進路支援、修学支援、資格取得支援の明確な理念・目標を持ち、実績を上げていることは大いに評価できます。

今回申請のあった「看護専門職業人への夢を実現する学生支援」の取組もその延長線上に計画されたものであり、実現されれば学生の実力養成と進路開拓に役立つと思われます。

しかしながら、これらの取組は、看護師養成校として当然進めていかなければいけない取組であると言えなくもありません。また、全体的に修学や資格取得支援に偏っていて、この取組を通して学生の人間性がどう変化(向上)していくのかが見えにくくなっています。就職先の病院等を含めて社会が看護師に何を求めているかといった社会的ニーズのリサーチも必要と思われます。

従って、貴学の地道な学生支援は認めるものの、今回は残念ながら非選定となりました。

Ⅲ 今後の課題

非選定理由に示されている看護教育としての理念や、教育内容、学生の成長といった側面については、申請用紙の枚数制限の枠の中では表現しきれていなかった点が指摘された。実際の教育の中では十分に教育的な試みが行われており、社会的なリサーチも不足しているわけではない。しかし、総体的な看護教育全体の視点を示して、なお、優れた教育実践をアピールする必要があることが、今回の申請を通してわかった。このことは、とりもなおさず、学生への全体ガイダンスや各授業科目においても、十分に周知徹底する必要があることの示唆であった。

今回の申請は選定されなかったが、このような申請作業を通して、教育の振り返りと再確認をすることができ大変有意義な作業であった。

Support for Students to Realize Their Dream of Becoming a Professional Nurse —Support system for course decision-making and acquisition of qualification—

Sachiko KOJO, Yukie SUGIMOTO, Kaori KINOSHITA, Fumio UNO

Summary

In 2008 the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology showed the program that backs up excellent educational practice for college education reform. Our nursing department applied for “student support programs responding to new social needs” in it. Our student support is carried out for the students to head for the future picture full of dreams and pride painted by themselves. Our support consists of three approaches; support for learning, course decision-making and acquisition of qualification. Unfortunately our application was not chosen. However, in the course of reviewing the educational performance, future issues became clear.